

## 2013年12月1日礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書15章1～10節

説教：いっしょに喜んでください

### 1 どちらが正しいのか

1) パリサイ人：罪人と一緒に食事をすれば汚れる

パリサイ人と律法学者たちは、イエスが罪人たちを受け入れ、いっしょに食事をしていることに対して、憤りを感じています。彼らは、民衆に対して日頃から罪人と一緒に食事をしてはならないと教えていました。もしそのようなことをすると汚れるからと言うのです。汚れは罪といっしょです。神がもつとも忌みきらうものです。だから罪人と一緒に食事をするな。そういう論法です。

確かに聖書には、罪を犯した者、汚れた者は民から断ち切られると書かれているところはあります(レビ記7章20節)。断ち切られるということは、言い換えれば、仲間に入れない、交わりから遠ざけるということでしょう。今なら、法律を破り罪を犯した者は裁判にかけられ、重い罪の場合は刑務所に収監されます。これと似ているかもしれません。

### 2) イエス：罪人を食事に招く

ところがイエスは、パリサイ人たちの教えを完全に無視します。罪人と呼ばれる人たちを堂々と受け入れ、ともに食事をされました。隠れてやったのではなく、パリサイ派の人たちが見ている前でやるのですから、これはもう相手をわざと怒らせるためにわざとやっていると言ってもよいくらいです。

イエスは聖書の教えを破ったのでしょうか。そんなはずはありません。イエスはこう

言っています。「あなたがたは、神の戒めを捨て、人間の言い伝えを堅く守っている。」

(マルコ7章8節)聖書を破っていたのはむしろパリサイ派の人たちであると指摘しました。

### 2 たとえ話

#### 1) いなくなった羊を捜す

そうだとすると、イエスがパリサイ派とけんかをしてまでわざわざ罪人と呼ばれる人たちと食事するのはどうしてでしょう。そのことを説明するために、イエスは二つのたとえ話を語ります。

一つ目は、九十九匹の羊を残し、いなくなった一匹をさがし出す羊飼いの話です。すでに聞いたことがあると思いますが、この羊飼いは、イエス・キリストであり、いなくなった羊とは私たちのことを指しています。神の囲いから羊のように迷い去ってしまった私たちは、自分の力では元の所に戻ることができません。羊は目がよく見えず、ちょっとしたことですぐに混乱し、自分が今どこにいるのかわからなくなるのだそうです。そんな羊を羊飼いは丁寧に捜しだし見つけ出し、元の所へ連れ戻していきます。

その連れ戻し方ですが、5節に「羊をかついで」とあることに注意してください。なぜかつぐのでしょうか。首にひもをつけて引っ張ってくれば十分はずです。おそらく羊の性質が関係しています。

私が小さかったときのことで、家では

羊を飼っていました。怒ると私に向かって頭を突いたり、気に入らなければこでも動きません。非常に頑固で、子供心に手を焼いた記憶があります。羊を連れ戻そうとしてもひもで引っ張るくらいではびくとも動きません。だから、肩にかつぎます。

このあと羊飼いは6節にあるとおり、「友だちや近所の人たちを呼び集め」ます。呼び集めたということは、当然家に招いて一緒にお祝いの食事をした。そういう意味なのだそうですね。羊は財産そのものですから、いなくなった羊が戻ってくることはうれしいことでしょう。でも一匹の羊が戻ってきただけで、そんな宴会を開く必要があるのか。なんとなく納得がいきません。なにかやり過ぎのように見えます。

## 2) なくした銀貨を捜す

二つ目のたとえ話を聞くと、この疑問はますます大きくなります。ある女性が銀貨を一枚なくしてしまいます。銀貨一枚は当時のお金でおよそ一日分の労働賃金に相当したと言われます。その銀貨をなくしたのですから大騒ぎをするのはわかります。でも、見つかったからと言って友だちや近所の女たちを呼んだりするのでしょうか。ここも同じで、呼び集めるというのは、宴会を開いたということです。宴会を開くためにはそれなりのお金が必要です。一日の労働賃金分のお金が見つかったので、お祝いするためにそれ以上の出費をしてしまった。どう見ても理屈に合いません。これはもう笑い話です。

## 3) 罪人が悔い改める

このたとえ話は、何を言いたいのでしょうか。7節にこうあります。「あなたがたに言いま

すが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九匹の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。」10節もほとんどおなじ事を言っています。いなくなった羊。なくしてしまった銀貨。どれも神の前から迷いでた私たち人間、罪人のことです。その罪人が悔い改めたなら、つまり、神の所に立ち戻ることができたら、それはすばらしい大きな喜びになる。そのことを言おうとしています。銀貨一枚見つかったら、その喜びを表すために、銀貨十枚を使っても惜しくない。罪人が悔い改めるということに神はそのように喜ばれる。そう言おうとしています。

それはよいとして、でも罪人である私たちはどのようにして悔い改めたらよいのでしょうか。神の前に戻るために何をしたらよいのでしょうか。次にそのことを考えます。

## 3 イエス・キリスト

### 1) かつぐ

二つ目のたとえ話に共通していることがいくつもありあます。いなくなった羊。なくした銀貨。どちらも所有者がいます。羊は羊飼いが所有しています。銀貨はこの女性が所有していたものです。このことは何を教えているでしょう。

自分の人生は自分のものである。かつての私もそうでしたが、多くの人はこんなふうに考えています。ですから、あなたのいのちと人生は神のものであると言われると、自分は神の操り人形ではないと言って反発します。

だれでも自分の人生は自由に決める、それが幸せだと思っています。けれども、どうでしたか。本当に自由だったのでしょうか。すべてがうまくいっているのならよいでしょ

う。でも人生は問題だらけです。人に大きな迷惑をかけてしまった。信頼していた人に裏切られた。あるいは、自分を信頼してくれていた人を裏切ってしまった。いけないとわかっていたけれどギャンブルにのめり込んでしまい、一家離散状態になった。病気になってしまった。高齢になった。自分なりに一生懸命努力はしました。でも、次から次へとたくさんの問題を抱えてどうしようもなくなっている。不自由になっている。それが私たちの現実です。

神はそんな私たちを捜し出します。見つけたなら神は、「さあ、一緒に帰りましょう」と声をかけます。でも、私たちは素直にはなれません。羊のように頑固に動こうとしない。それでも神はあきらめません。私たちを肩にかつぎ上げて、神の家に連れ戻そうとされます。

けっして軽いものをつぐのではありません。相当の重さがあります。体重のことではありません。主は私たちの罪をかつがれるのです。主が犠牲となられることを現しています。

主に捜し出される前は、冷たい空の下でぶるぶる震えていました。心細く感じていました。けれども今、主の背中が私を暖めてくれます。その暖かさが自分を包み込みます。この方が心から自分を迎えてくださっていることが背中からわかります。神の所に戻ることは不自由になるのではない。心から安らげる本当の自由が主の背中にある。そのことに気がつきます。

神に戻るために人間は一生懸命何かをするわけではありません。もともと人間は自分の力では戻れないのです。神に背き続ける。それが私たちの腐った罪の性質なのです。神に

捜しだしてもらい以外に道はありません。

「私は別。神は私のことなど覚えていない。」そう思いますか。決してそんなことはありません。九十九匹を置いてでもなくした一匹を捜すと書いてあります。

## 2) 汚れを引き受ける

律法学者は考えました。罪のない者も汚れてしまうから、罪人と食事をしてはならない。しかしイエスは考えました。「わたしは進んで罪人と食事をします。あなたと食事をして、あなたと同じ罪人になり、あなたの罪を背負って罪人としてさばかれる。そのためにわたしは来ました。」

私たちを捜し出すために、この方は二千年前にベツレヘムで人としてお生まれになり、私たちの所へ来てくださいました。神が罪人と同じ姿になりました。私たちをご自分の肩にかつぎ、背中に背負うために、この方は来られました。

あなたの罪をすべてわたしが引き受け、あなたの身代わりとなって私が十字架でさばかれる。あなたの罪はすべて赦される。そのことを知ったとき、この方にすべてのことを打ち明けることができました。それが悔い改めということです。

そんな告白を聞いて神はどうされるのか。神はご自分ひとり喜ばれるのではない。うれしくてうれしくて、もう外に出て行って友人を呼び、近所の人たちを呼び、盛大な宴会を始めていきます。飲めや歌えやの大宴会を開きます。

罪に汚れた者を見つけ出し、いっしょに喜ぼうとされる神のみこころに感謝したいと願います。

